

# 宗教の太古性と残存性に関する一考察 —マヤ・カトリック村落マニにおける口頭伝承を材料として—

A Study of Participation in Religious Symbols and Religious Meanings  
—with reference to Oral Traditions in a Mayayucatec Catholic Community,Mani—

中別府 温和

本稿の目的は、マニにおける現地調査結果を材料として、宗教現象の太古性と残存性の一側面を抽出することである。そのために、マニで最も古い儀礼慣習の一つである雨乞いの儀礼を材料として、その儀礼の過程ならびに儀礼に関連する口頭伝承を分析した。

その結果、社会や文化のあり方の根底的部分に関わる時間、空間、分類、数などの範疇が、雨乞いの儀礼およびそれをめぐる口頭伝承ならびにマヤの人々の思考と行動に現在でも保持され、重要な意味を持ちつづけていることが解明された。

これらの結果は、従来マニでの調査研究によって明らかにされた社会構造、政治経済的態度などの結果と合わせて体系化されるとき、宗教現象のもつ太古性と残存性を支持する成果となるとともに、宗教現象の変容の解明の基本的な材料を提供するものである。

今後は、今回集団の断面で試みられた分析が、同様の分析視点に立って個人の断面で行われ、宗教現象の太古性と残存性という仮説の検証に使用されなければならない。

キーワード：マヤ・ユカテック マヤ文化 カトリック文化 儀礼慣習 説話伝承

## 目次

- I はじめに—問題と目的—
- II 方法
- III マニにおける儀礼慣習
  - 1 マニの農耕
  - 2 マニの儀礼慣習
- IV 雨乞いの儀礼(ch'achac)
  - 1 背景
  - 2 雨乞いの儀礼 (ch'achac) 過程の概要
- V 雨乞いの儀礼の分析
  - 1 儀礼の過程

2 祈り

3 sak'ap

## VI メン（呪医＝祭司）と儀礼慣習

1 マニのメン（呪医＝祭司）

2 メンとyumtz'ilob

## VII おわりに

## 注 引用参考文献

## I はじめに —問題と目的—

宗教は、言語と同じように、人間の現実の生活のすべての面において生きており、人間の生に意味を与えている。同じ宗教を信じるということは、程度の差こそあれ、生活のあらゆる場面で、或る意味を共有することであり、それを分有することである。

宗教を理解するためには、どこにどのような意味がどのように共有されているのかが厳密に解明される必要がある。この課題は、野村が主張するように<sup>1)</sup>、個人と集団の両方の面で明らかにされなければならないとともに、時間・空間、社会構造、政治経済的態度など宗教が存在する文化のすべての局面で精密に明らかにされなければならない。

言語が音声や文字で意味を伝えつつ存続変容してきているように、宗教は儀礼や象徴などをとおして、信者が生きていくためになくてはならない意味を与えながら太古から存在しつづけている。宗教的儀礼や象徴ならびに宗教的意味の理解の意義はここにある。宗教的儀礼や象徴をめぐる事実を解明し、それらとの関連でどこにどのような意味が太古から共有され分有されているかを解明することは、宗教を理解するために重要な位置をしめているのである。

## II 方法

宗教は、デュルケムやモースも言うように<sup>2)</sup>、それが根づいている社会や文化の原初的な部分を構成している。法や経済や科学に関することは、古代においては宗教にその起源をもち、以来、さまざまな形で現代まで存続し、あるいは変容してきている。宗教の集合的な性質は、デュルケムやモースによれば、社会や文化の根底的部分に関わり、時間、空間、分類、数、などの範疇は宗教から生まれ育まれてきた。この考え方にもとづいて、小論では、宗教的なものの持つ太古性および残存性と変容という視点と、宗教的なものの地域や社会による分有という視点から分析を試みたい。

宗教的なものは太古の要素を含みつつ存続変容するという視点から分析するために、メキシコ

ユカタン州の一カトリック村落マニ（Mani）に保持されてきている儀礼慣習を分析する。

マニは低地マヤに位置するユカタン州の一カトリック村落である。Chilam Balamの予言、15世紀頃に「羽毛の蛇神(Kukulkan)」崇拝への記憶によって慣行されていたマニへの巡礼、Fray Diego de Landa (1524-1579) によるマヤ古文書の焚書などの事実から、マニには古いインディオ・マヤ的要素が色濃く残っていると考えられる。

マニには486世帯5000人のインディオが生活をし、ほとんど全ての村人がマヤ語とスペイン語の両方を使用している。マニの人々どおしのコミュニケーションにおいてマヤ語が優先され、農耕の場面での会話も全てマヤ語である。マヤ語を話さない人々とのコミュニケーションにおいてはスペイン語が使われる。

インディオである村人のほとんどがカトリックである。1548年、ユカタンで最初のカトリック神父たちがシュウ（Xiu）の都マニで布教活動を始めた。17C初頭に建てられたカトリック教会が今も村の中心部にそびえ立っている。教会を取り囲みながら広場、運動場、遊戯場、村役場、日用雑貨小売店、幹線となる道路が存在する。ここは祈り、祝祭などの宗教的行為、スポーツ、遊戯、政治的活動、経済的行為、交通などが展開する空間であり、マニの人々の現実の村落生活の中で核となっている。

本稿は、1983年以来、マニで継続してきている現地調査を研究方法の基本とし、その調査研究によって蒐集された原資料を材料として分析を試みた結果を内容とする。

## III マニにおける儀礼慣習

## 1 マニの農耕

## 1) ヒメネス家の場合

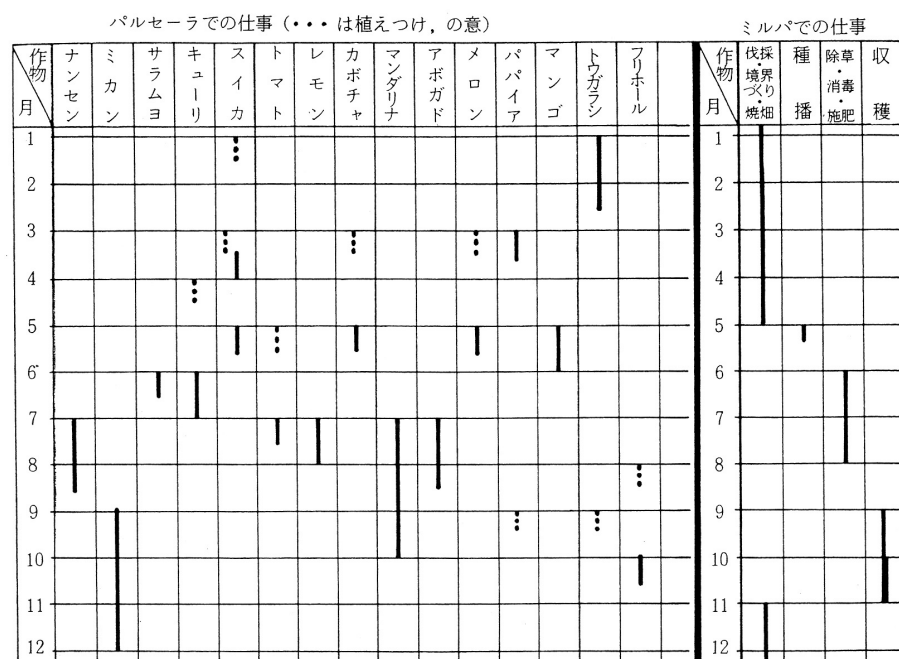
マニの人々の現実の生活場面は強く農耕に限定されている。486世帯の約70% (338世帯) がパルセーラ<sup>3)</sup> (果物作り) およびミルパ<sup>4)</sup> (トウモロコシ作り) を所有し、農耕を専業としている。男3人／女7人の10人家族であるヒメネス家は、パルセーラの所有面積6 ha (うち3 haは開拓中)、テレビと軽トラックの所持、成人女子4人のウィピル裁縫による副収入 (一着3000~4500ペソ) などの事実から、あるいはコンクリート (床) とパホ (シュロの一種; 屋根を葺く) で築造した家 (一軒10万ペソ) に住んでいる事実から、経済的には「中の上」あるいは「上」の評価を下しうる家族であるが<sup>5)</sup>、そのヒメネス家は10数種類の柑橘類、果物類をパルセーラに栽培し、年に約74万ペソ (1ドル≒330ペソ) の収入を得ている<sup>6)</sup>。

またヒメネス家の場合、48haの山林を年に4 haずつ焼畑にし、ミルパにしていく。12年で一巡するが、その時点で木々の生長が十分でない場合、他の山林所有主から借地し、焼畑を行う。1 ha当たり平均500~1000kgのトウモロコシの収穫がある。そのうち500kgを家族10人の食料として消費し、残りを1 kg≒45ペソで売買する。

マニはヒメネス家をもって一つの典型とする農家が集合した村落である。表(1)はパルセーラとミルパにおける一年サイクルの労働の様態を図表化したものである。パルセーラにおいては特に5月～8月に収穫の仕事が集中し、11月～5月にかけてはミルパの伐採、境界づくり、焼畑の作業が入る。9月～10月が比較的仕事量は少ないが、マニの人々の経済的活動の大部分は一年を通じて農耕を軸に展開している。

さらに、パルセーラとミルパでの労働には、教会に関わる行為などと比して、より多くの経費が負担されねばならない事実も表(2)から取り出される。

表(1) パルセーラとミルパでの仕事(…は植えつけ、の意)



表(2) ミルパ、パルセーラ、教会での仕事に要する日数と経費

ミルパ				パルセーラ			
	単位	ペソ	3～4haにかかる日数		単位	ペソ	3haにかかる日数
伐採	1メカテ	500	3ヶ月	伐採	3ha	8,000	1ヶ月(1人)
境界づくり	1メカテ	100	2ヶ月	境界づくり(2m間隔)	〃	1,500	1週間(1人)
焼畑	4ha	1,000	3ヶ月	焼畑	〃	800	1日(2人)
除草	1メカテ	400	1週間	除草	〃	3,000	1ヶ月(1人)
種播	1メカテ	100	1週間	種播/植えつけ	〃	1,800	4日(1人)
取り入れ	1メカテ	100	6人で3日				
			(5頭の馬で運ぶ)				

教会

	単位	ペソ
洗礼	1回	500
祝福(bendicion)	〃	300
ミサ(日曜のミサ・指定)	〃	500
ミサ(死者のため)	〃	500
ミサ(結婚)	〃	1,000
ミサ(15才のお祝)	〃	800

マニはTz'anと10km、Oxkutukabと12km離れて位置しており、これらの村落間をバスが一日に数回往復するほどの交通量である。職業の分化は少なく<sup>7</sup>、出稼ぎを除くと人口移動も極めて少ない。パルセーラの作物と余剰のトウモロコシおよびウィピル(マヤの伝統衣)は商品化されているが、その他の領域で工業化などのなされていない村落である。

2) メン(呪医=祭司)

ところで一定地域に定着し、農耕を営むことは必然的に水、土地、山野に深く関わることであり、それらを共有することでもある。水、土地、山野などの自然的因子がマニの人々の経済的活動、現実の生活の大部分を強く規制しているのであれば、そこに基因する不安や危機は身体や精神の領域から来る不安(病気、貧しさ、生の意味づけなどに基づく不安等々)と同じく最も大きく、基本的なものであるはずである。この不安は個人的というよりは集団的なものであり、また、どうしても立て直さなければならない不安定な状況である。

心の病をも含めた病気からくる不安や、水、土地、山野などを源泉とする不安はメン(呪医=祭司)によって立て直される。マニに住む誰でもがこれをなすうるのではない。そして、メンは正にこの点において他の人々と区別されるべき存在なのである。他村の人々でさえメンのそうした力能を良く知っており、不安の立て直しの依頼にマニのメンを訪れる。マニに4人(男3人/女1人)のメンが存在するが、村の人々は皆かれらを知っており、全てのメンの評価もする。

メンは治病をする時も、その他の不安や危機を立て直す際も種々の儀礼を行う。或る集団に外部から圧力が加えられたとき、その圧力が人的なものであれ物理的なものであれ、その集団とその集団を構成する個人がその圧力に対してどのように反応するかを宗教学的視座から分析することは重要であるが、それらの反応が宗教の行動的断面に表出したものの1つを儀礼と考えていく。集団が持続的にであれ、一時的にであれ、或る不安の状態に置かれている場合に、儀礼の担うメカニズムのうちで重視すべきものは、この集団が最も中心的なものとして、最も価値の高いものとして保持している領域が、他と区別され強化され、再活性化(revitalize)される側面である。種々の儀礼はÉmile Durkheim、Marcel Mauss、Clifford Geertzなどが指摘するように、記憶の再生産の

機能を通して、あるいはE.R.LeachやVan Gennepの強調するように、人物・事物・状況を変容させる契機や手段となって、先のメカニズムを維持していく<sup>8</sup>。

メンによって保持され、行われている儀礼をこのような性質のものとして位置づけ、それ故にその儀礼はマニの人々が高い価値を置く断面を含むだけでなく、マニにおいてより古い文化因子、すなわちインディオ的・マヤ的文化因子を含むものとして仮説的に考えて調査分析を行っている。

## 2 マニの儀礼慣習

マニの儀礼慣習を観察すると、儀礼場面に主として二つのコンテクスト(脈絡)が存在することが明らかである。一方は教会と教会内に関わるコンテクストであり、他方は教会外、例えばバルセーラ、ミルパ、山野などの空間に関わるものや、メンの家で行われる治病儀礼を含めたコンテクストである。儀礼慣習はこの両方とその他の諸々の儀礼からなる儀礼複合として存在してきており、儀礼間には有機的な連関も存在するので、個々の儀礼の分析は儀礼の体系の中で位置づけられ解釈されていかねばならない。

教会外の儀礼コンテクストでの儀礼慣習はメンによって保持されてきている。それらは具体的には、治病儀礼、水のための儀礼(huáji cheém)、土地のための儀礼(jetz'lúum)、ミルパのための儀礼(huaji kol)、雨乞いの儀礼(ch'achac)である。ここでは雨乞いの儀礼とミルパのための儀礼を中心に分析を進めていく。これらはメキシコ原産の主要食物であるトウモロコシの生産と消費に関わる儀礼であり、経済的生産と深く結びついて人々の現実の生活を規制してきているために、新しい宗教が入り込んで来たにしても、マニの生態的条件や人口移動が最小の変化しか経てないことを前提とすれば、表面的にその解釈や意味を変容させるかも知れないが、根底からそれらを消失させるとは考えにくい。カトリシズムが本来的には農耕との結びつきが深くそれとの親和性が高いとしても、なおこれらの儀礼を分析していくことは意義があると考えられる。さらに、先述したように、これらの儀礼が集団的不安の立て直しに関係し、かつ、立て直しの場面での重要なメカニズムとして、その集団が最も高い価値づけを行ってきた領域の再活性化(revitalization)に向かうと仮説的に考えていくなれば、それらの儀礼の分析の必要は理解されるであろう。

## IV 雨乞いの儀礼(ch'achac)

### 1 背景

#### 1) 焼畑農耕

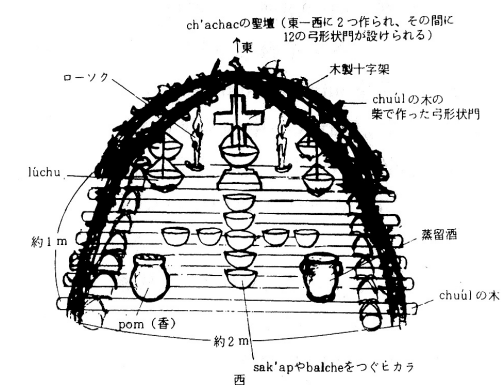
1986年の調査期間中、マニでは極めて降雨が少量であった。雨量の少なさは調査者自身も、1984年の調査時期(7月23日～8月12日)のそれとの対比において容易に理解することができた。村人たちの間でも降雨量の少なさと、それが必然的に及ぼすであろうトウモロコシへの悪影響が頻繁に話題として取り上げられるようになった。

マニの土質は赤土で石灰質であるだけでなく、石の非常に多い大地でもあり、トウモロコシの順調な生長には適切な量の雨水が不可欠である。トウモロコシは基本的には連作を許さない作物であるばかりでなく、マニでの耕地、ミルパは焼畑を手段として拓かれてきたので、ミルパは原則として家から遠く離れた場所に位置していることなどから、マニでのトウモロコシ栽培は依然として雨水依存する度合いが相当に高い。早魃は主食の涸渇にほかならないのである。

### 2) 準備

村人たちの不安が高まっていく中で、マニの4つの地区(banda)<sup>9</sup>のうちSan José地区の人々とSan Tiágo地区の人々が雨乞いの儀礼(ch'achac)を行うことを決断した。San José地区は約100世帯からなるが、そのうち17人の世帯主成人男子17人が発起してch'achacのorganizador(主宰者)となった。

かれらはメンにch'achacを行ってくれるよう依頼し、メンの承諾を得て、日取りを8月16日と17日の二日に決めた。8月13日～15日の3日間、すなわちch'achacの3日前にマニの村人の家を個別に訪れ、①ニワトリ、②トウモロコシ、③金銭のいずれをもってch'achacに参加するかを尋ねてまわる。8月16日、ch'achacの当日、organizadorのうち8人が人家からかなり離れた裏山の一部をch'achacのための祭壇として一日がかりで切り拓く。そして、そこにchuulの木を使用して、写真(1)のように2つの祭壇(東一西)と12の弓形状門(arco)、それから数m離れた場所にpii



### 写真(1)

第二の聖壇の前に膝まづいて祈るメンとahkin(ch'achacの儀礼の際、メンの補助をする人)。メンは木製の十字架と供物を手に持っている。祭壇の下に足をしばられて座っているのがmúchu(カエル)役の男の子供たち。鳴き声によってmúchuには6種類の名称が存している。写真の手前で石に腰かけているのがbalamの役の成人男子。

口笛を吹いたり、棒で地面や木を叩いたり、小石を藪に投げたりして音を立てる。

(地中かまど)<sup>10</sup>を2m×8m位にわたって用意する。夕刻8時ごろにメンが儀礼を始めるまでにbalche<sup>11</sup>とsak'apが準備される。

## 2 雨乞いの儀礼 (chachac) 過程の概要

ch'achacはマニにおいては2日にわたって行われる。その儀礼の過程の概略は次のごとくである。

### (1) 8月16日 (金) 第1日目

#### (時刻) 儀礼の過程の概要

- 20:00 balcheを5個のルーチュにつぐ。  
sak'apを9個のルーチュにつぐ。  
póm (香) を台の周辺にくゆらす<sup>12</sup>。
- 20:20 メンが聖壇の前に膝まづいて祈る。  
集まっている成人男子たちは、かたまわって雑談をしている。
- 20:30 メンが別の聖壇の前で祈る。
- 20:37 メンは祈りを終えると、男たちと雑談をする。
- 21:10 メンがbalche、sak'ap、アグアルディエンテをarcoにふりかけて、ch'uyuに置かれているlúchuを用いて参加者ととも balcheをまわし飲む。  
メンがch'uyuにlúchuをもどす。  
参加者でsak'apをまわし飲む。
- 21:30 メンがsak'apを作り始める (2回目)  
メンはアマカを木にわたす。ここで夜を過ごすためである。  
メン2つの聖壇の上に置いてあるヒカラ (18個) と、2つの聖壇の間に設けられた12のarcoに吊されたch'uyuのlúchu (12個) にsak'apをつぐ。  
メンが2つの聖壇の上に吊してあるch'uyuのlúchu (10個) にbalcheをつぐ。  
メンがpóm (香) を聖壇の周辺にくゆらす。
- 21:50 メンが2回目の祈りを捧げる。
- 21:58 メンがpómを聖壇の周辺にくゆらす。  
メンが第二の聖壇の前に膝まづいて祈る。
- 22:08 メンの祈りが終了する。
- 23:10 メンがsak'ap、balcheを第一の聖壇の前方に2回ずつふりまく。残りのsak'apはバケツの中へ入れる。また、聖壇の上に吊されている5つのch'uyuのうち、中心に位置しているlúchuのbalcheをバケツの中へ入れる。

メンが聖壇の上のヒカラにつがれているbalcheを除いて、他のbalcheを捨てる。

参加者でbalche、sak'apをまわし飲む。

23:30 メンがsak'apを作る (3回目)。

メンが第二の聖壇のch'uyuのlúchuにsak'apをつぐ。

メンが第二の聖壇の上に置かれたヒカラのうち、中心に位置しているものにはアグアルディエンテをつぎ、その他のヒカラにはsak'apをつぐ。

第一の聖壇は前回と同じ仕方で用意される。

23:45 メンが3回目の祈りを始める。

24:00 メンによる祈りが終了する。

### (2) 8月17日 (土) 第二日目

- 6:40 参加者がsoskilの皮をいぶして剥ぎ、割き、細い紐を編み、小さな結び目 (mokbil) を作る。参加者の一人がニワトリ一羽にアグアルディエンテを飲ませる<sup>13</sup>。  
メンがニワトリの首をひねって次々に殺していく。ニワトリは29羽殺された。
- 8:00 第一の聖壇の前で、メンが膝まづいて祈る。
- 8:05 第二の聖壇の前で、メンが膝まづいて祈る。  
女たちが三々五々集まってきて、トルティーヤをつくり始める。メンが祈る場所からは20~30m離れている。
- 8:30 参加者男性によってpiiの準備が始まる。  
booの葉の根元を切る。  
sak'apの材料、トルティーヤの材料、ニワトリ、ニワトリ一羽分の肉の半分、ブタの肉 (キロ単位) を持った人々が集まってくる。
- 9:00 成人男子25人 女子30人  
参加者男性がpiiに火をつける。
- 9:05 メンがsak'apを第一の聖壇の前方、左、右にふりまく。
- 9:07 メンが第二の聖壇の前で祈る。
- 9:15 メンが第二の聖壇の上でsak'apをふりまく。  
メンが第一の聖壇に隣接しているarcoのsak'apをふりまく。  
ハチミツ4本、sak'apの材料4が集められている。
- 9:30 参加者がsak'apをまわし飲む。女たちも、これに加わる。この女たちは各々3.5kgのマイスを持参している。
- 10:10 メンは第一の聖壇の前に膝まづいて祈る。  
一人の男はlek' (ヒカラの大きいもの) を棒で叩く。lek'は水を入れた容器の中に浮かべて

ある。人々はこれを雷という。

10:17 メンが第二の聖壇の前で立って祈る。

10:25 メンの祈りが終了する。

参加者がbalcheをまわし飲む。女たちはトルティーヤの用意を終えたら帰っていく。

12:10 この頃までに、yashwa<sup>14</sup> 4コ、ch'im<sup>15</sup>60コ、wolwa<sup>16</sup> 15コ、piib<sup>17</sup> 102コ、k'ol<sup>18</sup>、yaáchi<sup>19</sup>が出来上がり、参加者男性によって第一の聖壇および第二の聖壇の上あるいはそれらの周辺に配置される。

lek'を叩く人がピューッと口笛を吹く。

カエル（男の子8名：第一の聖壇と第二の聖壇を支える脚に足首をしばられ、座している）たちが鳴き出す。オーティン、オーティン、レック、レック、レック…（くり返し）。

12:15 メンが第一の聖壇の前で祈る。

12:20 先の過程のくり返し

↓

16:00 メンがyashwa, ch'im, wolwa, piibなどの食物を集まった人々に配る。

## V 雨乞いの儀礼の分析

### 1 儀礼の過程

#### 1) 場所と時間

ch'achacの儀礼の過程は(1)メンによる祈り、sak'ap、(2)男たちによる供物の準備と、それへの女たちによる裏方的援助、(3)メンによる祈り、sak'ap、sak'apのまわし飲み、ch'achac、(4)メンによる供物の分配、儀礼的共同食事、を軸に構成されている。

sak'apのまわし飲み、ch'achacの部分を除く儀礼の過程は、メンの行う水のための儀礼、土地のための儀礼、ミルパのための儀礼に基本的に共通している。ここで、一つの対比的資料として、水のための儀礼の過程を提示しておく。

この儀礼は作物の出来が良くないとき、牛や家禽が原因不明の病気になったときに、それらの所有者がメンに頼んで行うものである。聖壇<sup>20</sup>が井戸の付近に設けられる。この儀礼は規則的なものではなく、義務とされてもいないがマニにおいて1人のメンが年平均12~15回(3人のメンによれば計36回前後になる)行うという。この儀礼を一度行うのに約4万ペソ(1ドル=330ペソ:10人家族の一ヶ月の食費7000ペソ)かかることを考えると相当の回数である。以下、その儀礼の過程である。

(1) Sak'ap、k'oolをヒカラについだ後、shibchéの葉で豚、鶏の油(iék)をすくってk'oolに十字を描く。ch'iimを聖壇の上に置くと、shibchéをも聖壇に置き、póm(香)を焚く。少量の炭火を入れた器の上からpómをふりかけ、聖壇の上や十字架の近くで振る。メンはshibchéを手を持って祈り始める。立ったまま5~6分、つぶやくように、十字架から供物への順に祈る。

(2) 男たちは地中かまどにおいて1時間半をかけてpiiを作り終えている。メンの祈りがすむと男たちはpiiを小さくほぐしにかかる。この仕事は成人男子だけで行うものであり、子供も参加せず、メンもこれを見ている。女たちは聖壇付近に決して近寄らず、数十メートル離れた木陰に寄り合って談笑をしている。バケツに入れられたk'oolと鳥(七面鳥・鳥)のスープを混ぜてyaáchiに鳥の足で十字を描き、描かれた十字の溝に、shibchéの葉で豚、鶏の油(iék)をすくってたらし込む。

(3) メンは祈り始める。聖壇上の供物へ、井戸の供物へ祈り、再び聖壇上の供物へ今度は膝まづいて祈る。5~6分間の祈りである。10分の憩いをへてメンは祈り始める。最初に十字架へ、井戸の供物へ、聖壇上の供物へ、井戸の供物へ(この際は井戸のshibchéを使って)の順である。祈り終わると、七面鳥、鶏の肝臓を片手で井戸へ投げ入れ、蒸留酒をも井戸の中へ少量注ぎ入れる。5分経つとメンはまた祈り始め、祈りながらバケツの中のyaáchiを片手でつまんで井戸の中に投げ入れ、次に井戸の前(東)、左(北)、右(南)、後(西)に投げる。この行為を終えると、聖壇にもどって最後の祈りを捧げる。

(4) メンが供物を集まった人々に配る。男にも女にも、また、この儀礼に直接参加しなかった人たちにも食物が分配される。家に持って帰って食べようとする人が何人かはいるが、基本的には食事はその場でなされる。

ch'achacの儀礼とhuáji cheémの儀礼の過程に共通する要素の多いことが理解されるが、他方では他の儀礼との対比においていくつかの異なりも観察される。ch'achacは他の儀礼(3~4時間)よりも長い時間を要し、2日にわたる。RedfieldやRojasの報告では通例の3日間の儀礼とされている<sup>21</sup>。マニにおいてもch'achacの儀礼が2日にわたって行われた後、聖壇や弓形状門は壊されることなくそのままにしておかれ、その後9日間organizadorのうちの2人が交替でsak'apをし続けなければならないことを考慮すると、さらに長い期間になる。

メンの行う儀礼は、治病儀礼(メンの家)、水のための儀礼(井戸の近く)、土地のための儀礼(裏庭など)、ミルパのための儀礼(ミルパ)であれ教会の外で行われるが、ch'achacは人家から数十メートル離れた山の一部を、ch'achacを行うごとに切り拓いて祭場とする。そこは儀礼のための食物や水の準備をするには不便な場所であるにもかかわらずそうするのである。ch'achacはマニにおいては山や林の中を拓いて行う儀礼である。

#### 2) 儀礼の主体

儀礼の主体が個人であるか集団であるか、あるいは私的なものか、公的なものかは判別が困難な場合があるにしても、儀礼の性質を決定する1つの基本的要素である。メンによるch'achac以外の儀礼は個人(家単位)で起こされて、その後の儀礼の過程において集団性を帯びてくる性質のものである。前述のhuáji cheémの場合は、成人男子14人、成人女子17人、子供15人計46人によって行

われている。ch'achacはそれらと比べると儀礼の集団性が強くなっている。ch'achacは17名の代表者が全体の名において発起し、他区の人々全員に参加を呼びかけていく。集団の範囲が拡大しているだけでなく、儀礼への参加者がsak'apを回しのみを行う事実からは、集団の規律性が強化されているとも考えられる。ch'achacには成人男性64人、成人女子60人、男子(青年)70人、同じく女子50人、計244人が参加している。日曜の夕刻のミサへの出席者数(170人ぐらい)やその他の儀礼への参加者数を上回る数である。

### 3) 経済的負担

ch'achacにかかる費用は以下のようである。

ch'achacに必要な費用(1ドル=330ペソ)

(1) 材料 ①ニワトリ 29羽 1羽800ペソ×29羽=23,200ペソ

②マイス 140kg 1kg50ペソ×140kg=7,000ペソ

③金銭(ペソ)

1) 350 14) 200 27) 200

2) 200 15) 500 28) 200

3) 200 16) 130 29) 150

4) 500 17) 200 30) 300

5) 300 18) 500

6) 300 19) 200

7) 300 20) 150

8) 150 21) 150

9) 100 22) 200

10) 100 23) 450

11) 500 24) 200

12) 25 25) 200

13) 500 26) 300

④経費 1) ペピタ

2) アグワルディエンテ

3) ローソク(candera)

4) ローソク(vela)

5) こしょうの実(pimienta)

6) caballo blanco

総計 7725ペソ

一人平均 258.5ペソ

総計 2,550ペソ

総計で約40,000ペソが費やされているが、この費用は一年牛一頭分、100kg豚一頭分、パホ造りの家一軒分に相当する。また、マニでは贅沢な方だと評価される結婚式の費用(40,000~50,000ペソ)とほぼ同じであり、ヒメネス家(男3/女7:成人)の1ヶ月の食費(7,000ペソ)の半分にあたる。ch'achacは集団的、公的な儀礼であるが、比較的多大な経費を費やす場面であると考えられる。

同様のことは、メンが行う他の儀礼についても言える。次に提示するのはhuáji cheémの場合の経費の一例である。

1) 七面鳥 5羽 ×6000ペソ=30,000ペソ

2) ニワトリ 5羽 ×800ペソ=4,000ペソ

3) 豚肉 2kg ×800ペソ=1,600ペソ

4) 豚油 1kg ×500ペソ=500ペソ

5) ペプータ 4袋 ×400ペソ=1,600ペソ

6) トウモロコシ 40kg ×50ペソ=2,000ペソ

7) メンへの報酬 200ペソ

総計 39,900ペソ

(1ドル=330ペソ)

## 2 祈り

メンの祈り<sup>22</sup>を材料とすると、sak'ap、balche、家禽や家畜の肉、トウモロコシを使った食物(yashwa、ch'iim、wolwa、piib、k'ool)は神霊に捧げられた供物と考えるべきである。

祈り(1)「聖なる酒を……dios yumbilの聖壇(mesa)の前に〔捧げる〕…偉大な東(noh lakin)にいる1〔人〕のchacへ〔捧げる〕…空の4隅(can titzkan)にいる4〔人〕のbalams (nucte balamob)へ〔捧げる〕…偉大な東のCoba(地名)にある神の部屋(abrencia)にいるdios chacへ〔捧げる〕…dios yumbilの聖壇の前に〔捧げる〕……San Miguelの聖壇の前に〔捧げる〕…1〔人〕のchacへ〔捧げる〕…dios yumbilの聖壇の前に〔捧げる〕…」(balcheを捧げるときの祈り)

祈り(2)「…ここSan Miguelの聖壇の前に、ここで私はsak'apの祈りを捧げる……ここdios yumbilの聖壇の前に、San Miguelの聖壇の前に、私が祈るときに…」(sak'apを捧げるときの祈り)

祈り(3)「balamの御座(balam kanche)へ、dios yumbil, balamへ、dios yumbil、ここに私はSan Miguelの畑(種まきをした畑)のために祈りを捧げる。ここで私は偉大な東にいる1〔人〕のchacの聖なる新鮮な水(=雨水)を願う。……偉大な東にいる1〔人〕のchac, balam, dios yumbil, 種をまいた畑のために、私はchacたち、水を降らすものたちに祈る、雨(hatzaknac; hadzanac)が来るように、雷(topooknac)が鳴るように、私は赤土(tan kancab)の前で祈る、初めて使われる土地の前で祈る、San Miguelの畑のために、偉大な

東にいる1〔人〕のchacに〔祈る〕、われらのyumbil、偉大な東の1〔人〕のchac、4〔人〕のbalamたち、水を降らすものたち、balam, dios yumbil, San Miguelの畑のために私は祈る、dios yumbilへ、それからbalamへ、San Miguel, 私は祈る、dios chacへ、dios balamへ……」(balcheを捧げる直前の祈り)

祈り(4)「ここに膝まづき、1つの聖なる、新しい、飼い慣らしたる生き物(santo zuhuy alak)を捧げる、ここdios yumbilの聖壇の前に、ここ1〔人〕のchacの聖壇の前に、もう1つ別の聖なる、新しい、飼い慣らしたる生き物を捧ぐ、San Miguelの聖壇の前に、dios chac, dios mehenbil, espiritu santo, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, ここに、1つの聖なる新しい、飼い慣らしたる生き物が捧げられた、dios yumbilの聖壇の前に、dios mehenbil, dios espiritu santo, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, ここに膝まづき、1つの聖なる、新しい、飼い慣らしたる生き物を捧げる、偉大な東にいる1〔人〕のchacの聖壇の前に、dios chac, dios mehenbil, dios espiritu santo, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, ここにdios yumbilの聖壇の前に、1つの聖なる、新しい、飼い慣らしたる生き物が捧げられる、dios chac, dios balam, 雲の中の入口(holhuntazmuyal), dios mehenbil, dios espiritu santo, 1, 2, ここに1つの聖なる、新しい、飼い慣らしたる生き物が捧げられる、dios yumbilの聖壇の前に、San Miguelの聖壇の前に、1〔人〕のchacの聖壇の前に、dios mehenbil, dios espiritu santo, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, ここに、1つの大きな嘴のついたやつ(ahnohcobte; u noh kublte)が捧げられる、1〔人〕のchacの聖壇の前に、San Miguelの聖壇の前に、dios mehenbil, dios espiritu santo, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, ここに、もう一つ別の聖なる、新しい、飼い慣らされた生き物で、大きな嘴のついたやつが捧げられる、1〔人〕のchacの聖壇の前に、dioa balam, 雲の中の入口、ここに、またもう一つ別の聖なる、新しい、飼い慣らした生き物で、大きな嘴のついたやつが捧げられる、dios yumbilの聖壇の前に、dios espiriu santo, 1, 2, 3, 4, 8, 9, 13, dios yumbil, dios espiritu santo」(家禽を聖別するときの祈り)

祈り(5)「dios yumbil, dios mehenbil, dios espiribil, santoの御名のもと、私の祈りが偉大な東に届いたら、Coba(地名)の神の部屋に届いたら、〔神霊は〕3度崇められるであろう。4〔人〕の偉大なchacたちへ、4〔人〕の偉大なbalamたちへ、私の祈りがChichen〔地名〕の神の部屋に届いたら、〔神霊は〕3度崇められるであろう、4〔人〕の偉大なchacたちへ、4〔人〕の偉大なbalamたちへ、ここに私は祈りを捧げる、ここdios yumbilの聖壇の前に、ここSan Miguelの聖壇の前に、偉大な東にいる1〔人〕のchacの聖壇の前に、……空の4隅、dios chacへ、dios balamへ、……4〔人〕の偉大なchacたちへ、4〔人〕の偉大なbalamたちへ、dios yumbilの聖壇の前に、私は祈りを捧げる、dios chache, 東の空の入口へ、……偉大なchacたちへ(nucte chacilob), ここdios yumbilの聖壇の前に、私は祈りを捧げる、……dios yumbil, dios mehenbil, dios espiritu santo, Amen」(供物が供えられた聖壇の前

に膝まづいての祈り)

祈り(6)「ここに、dios yumbilの聖壇の前に、私は捧げる、ここにdios yumbilの4つの〔トウモロコシで作った〕食物(kanppel uahi)がある、ここにdios yumbilの聖なる食物がある(santo x-hol-uahi), ここに5つの〔トウモロコシで作った〕食物(hoppel uahi)がある、dios balamへの、dios yumbil, dios mehenbil, dios espiritu santo, Amen」(メンが供物の一つ一つを手を持って捧げるときの祈り。祈り終わると、それらを聖壇の上に置く)

祈り(7)「[balcheの満たされた小さなヒカラを捧げながら] ……dios yumbilの聖壇の前に……[balcheを捧げ終わった後] dios yumbilがかれの器を受け取る、dios yumbil, [balcheを少量ヒカラに注いで、捧げて] ……dios yumbilが2番目の小さな器を受け取る、聖壇の前で、……[しばらくして] 今や、2番目の小さな器を受け取るときである、dios yumbil ……」(balcheを飲む直前に捧げる祈り)

ch'achacの中で捧げられるこれらの祈りにおいて、聖壇はdios yumbil、San Miguel、偉大な東にいる1〔人〕のchacの聖壇として語りかけられている。マニには常設の聖壇はない。これはch'achacの儀礼が基本的にはperiodicalなものでなく、criticalなものであることとも関係するかもしれないが、この儀礼が向けられる対象とその性質との関連でとらえられるべき一面でもありと考えられる。

聖壇はメンや儀礼に参加する人が東に面して位置するように設けられている。メンは東に向かって祈る。マヤ-ユカテカにおいては東は偉大な方角であり、そこにchacがあり、そこから雨が来る。東の空には入口のようなものもあると考えられている。

供物が捧げられる対象は、偉大な東にいる1〔人〕のchac、4〔人〕の偉大なchacたち、あるいは空の4隅にいる4〔人〕のbalamたちである。ch'achacのために特定の日あるいは特定の時刻は定められていない。したがって、この儀礼が向けられ供物が捧げられている対象であるchacたちやbalamたちは人々の供物をもつての働きかけに時日を問わず応じると考えられている。

ch'achacの祈りの中には願いごとの内容の数が比較的少ない。San Miguelの畑のためにchacに頼んで雷を鳴らせてもらったり、雨を降らせてもらったりすることぐらいである。その際chacの名称がdios chac、1〔人〕のchac、4〔人〕の偉大なchacたち、偉大な東にいる1〔人〕のchac、偉大な東のCoba(地名)の神の部屋にいるdios chacのように多様であることに注目すべきである。sak'apを捧げるときの祈りの中でも、雷光の神chac、雷火の神chac、雷鳴の神chac、雷雨の神chacなどとして呼びかけられている。

雲の中に、あるいは東の空に入口のようなものがあるとの表現や、雲の4隅とか、空の4隅にいる、などの表現も注意すべきである。



### 3 sak'ap

sak'apはトウモロコシの粒を石灰を入れずに煮た後、粉にし、それをコマルの上で焦げない程度に焼き、コマルからおろして少量の水を加え柔らかくし、ボール状にしておいたものを水に溶いたものである。マヤ・ユカテカの伝統的な食物の一つである。

儀礼としてsak'apは、四方と中心に置かれた5個のヒカラにsak'apを入れて、祈り、shibchéの葉でsak'apを少量すくって四方にまく行為である。この行為はメンの行う水のための儀礼、土地のための儀礼、ch'achacの儀礼において中心的な要素をなしており、頻繁に繰り返されるだけでなく、メン以外の人々によってもミルパ、トウモロコシとの関連において極めてしばしば行われる性質のものである。それらを具体的に記述すると以下のようである。

#### 1) ミルパでのsak'ap

- (1) トウモロコシを植えつけるべき場所に行き、その土地の四方に棒を立て、それを目安に狭い道巾ほどに雑草を刈る。雑草を刈り始める前にsak'apをする。shibchéの葉でsak'apをすくって、東(lak'in)、北(shaman)、西(chik'in)、南(nojol)の順にふりまく。
- (2) 4月、5月に焼畑をする前にsak'apをする。

#### 2) 焼畑後のsak'ap

このときは、sak'apに蜂蜜を入れる。sak'apに蜂蜜をいれるのはこのときだけである。

- (1) トウモロコシを植える前にsak'apをする。
- (2) トウモロコシの種子をまいて2日目に行う。このときのsak'apをmak jol shul (makふさぐ、jol穴、shul穴をあける鉄器具)とよぶ。
- (3) トウモロコシが焼畑の木株の高さになったとき、sak'apをする。このときのsak'apをbul chun ché (bulchun株、ché木)とよぶ。
- (4) トウモロコシの一番上の花が開くころにsak'apをする。このときのsak'apをfultéií (ullíí)とよぶ。
- (5) 若いトウモロコシ(elote)ができ始めるころにsak'apを行う。このときのsak'apをu tal jék (u 3人称単数、tal来る、jek elote、eloteがつく)
- (6) トウモロコシの収穫に感謝してsak'apをする。

##### ①sak'ap primicia (acción de gracia:agradecimiento)

12枚のトルティーヤを作ってyumtz'ilobに捧げる。ニワトリ一羽、若いトウモロコシ10個を家の祭壇に供え、祈り屋(メンと区別されている。女性が多い)に来てもらって祈ってもらう。

##### ②huájikol

これはメンが行う。メンを呼んでhuájikolをしない人は、12本のトウモロコシと2本のロ

ーソク(1本はマリアのため、1本は神のため)を持って教会に行き、祭壇に供えて祈る。

#### 3) 焼畑後のsak'apでの祈り

トウモロコシの栽培および生長、収穫の節目ごとにsak'apが行われている。ミルパの焼畑の際にsak'apをして捧げる祈りは次のような内容である。

祈り(8)「ここで、私はこのsak'apを、南風(nohol ik)に捧げる、強いつむじ風(kakal mozonkanik)に捧げる、また、偉大な東風(noh lakin ik)に捧げる、また、私のミルパ(col)の4つの隅に捧げる、また、ここで、私はこのsak'apをbalamの神たち(yum balamob)に捧げる、北風(shaman ik)に捧げる、西風(chikim ik)に捧げる、南風(nohol ik)に捧げる、偉大なdios yumbilに捧げる、San Miguelに捧げる、dios yumbil,dios mehenbil,dios espiritu sato」

この祈りは風(ik)に捧げられている。焼畑の際には風が極めて重要な働きをする。風が吹いて炎を運び、木々が完全に燃焼し立派な灰と化すことは焼畑で不可欠のことである。‘強いつむじ風’が待望されるのは当然のことである。Chan Komでは村人たちが風を呼ぶ口笛を吹く習慣がある<sup>23</sup>。

トウモロコシの栽培—生長の過程では人々は「風が吹かぬように、沢山の実がつくように」と祈る。マヤ—ユカテカの土質は石灰質の上に極めて薄い地層が存し、そこに浅く根をはったトウモロコシは風に弱い。マヤの人々はトウモロコシの種をまくときに、カボチャや豆類の種子も一緒に穴に投げ込む。豆は地中に窒素を生成し、これがトウモロコシのための地質維持に有益であるばかりでなく、カボチャは地面をはって葉を作り、地面への直射日光を和らげ、豆の茎とともにトウモロコシが倒れるのを防いでいる。こうした努力に加えて、風を宥める祈りも捧げられるのである。

#### 4) トウモロコシの収穫祭におけるsak'ap (sak'ap primicia;huájik'ol)での祈り

トウモロコシの収穫に感謝して行われるsak'ap(sak'ap primicia;huájik'ol)の際には以下のような祈りが捧げられる。

祈り(9)「私の祈りがyum San Miguelに届くとき、神霊は3度崇められる……私の祈りが、Black Pahuatun<sup>24</sup>に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがRed Pahuatunに届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがYellow Pahuatunに届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがWhite Pahuatunに届くとき、神霊は3度崇められる、1つの聖なる、偉大なprimiciaが捧げられる、空の4隅に(kan titzkaan)、雲の4隅に(kan titzmuyal)、1つの聖なる、偉大なprimiciaが捧げられる、私の祈りが雷光の神chac(hatzenkaan chac)に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷火の神chac(lelemkaan chac)

に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷鳴の神chac (boholkaan chac) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷雨の神chac (chacleekaan chac) に届くとき、神霊は3度崇められる、空の4隅に、雲の4隅に、神霊に3度捧げ物が送られる、arcangel、1つの聖なる偉大なprimiciaが捧げられる、空の4隅に、Amen」

この祈りの中心はchacである。

#### 5) sak'apをめぐる口頭伝承

ところで、sak'apについては以下のような説話伝承が存している。

##### 説話 (1)

「あるとき、ここにいて、sak'apを送った(をした)。sak'apはミルパを焼くときに必要なのだ。そこで、わしは畑でせず、ここで(家で)した。畑は10レグア(40km:とても遠い、の意味)あるので、ここでsak'apをした。sak'apをして、5個のヒカラをこうならべていた。

そこへニワトリが来て、ひとつのsak'apをひっくり返した。だからyumtz'ilは、それを受け取れなかったんだ。sak'apをshibchéの葉ですくって、四方と机の下に落とし、あとは子供たちにも飲ませた。

そして、わしは南のあそこにいた。収穫をする時期だった。トウモロコシ畑の家に行った。そこへ、だれか向うから人が来ているようであった。着いたとき、その人は大きな男でヒゲを胸までたらしめていた。戸の所に着いて男は私を呼んだ。私に「おい、お前のsak'apは村では受け取ってないぞ。なぜなら、あのとき、ニワトリが来てsak'apを飲んだではないか。だから村では受け取れてないんだ。お前の眼の所と背中の中にあるのは悪い風なんだ。明日、収穫したら、5つのelote(若いトウモロコシ)を煮て、テーブルに乗せ、5個のヒカラのsak'apも乗せろ、そうしたら我々は受け取るだろう」

私は、それはよかろう、と答えた。彼はそう言って、向こうの木の下で眠った。夜が明けてから、トウモロコシを5つ取り、煮て、手回し粉ひき器で粉にしてsak'apをつくった。sak'apとトウモロコシを置いてyumtz'ilobを呼んで、受け取ってもらうように頼んだ(祈った)。sak'apを四方と机の下にすて、あとは手に水をつけて眼と背中を洗ったら、スッキリと治った。

家に帰ってから、マニのメンの家に行って診てもらった(Benancio Chan:Men de Mani)。メンからtichi k'ak(水晶球の後にローソクを立て、そこに見える陰影・形で診てもらおう)で診てもらうために。眼と背中が悪いと言うと、sastún(水晶球、ビー玉、ガラス玉)を取り、聖人を呼んで、sastúnを見て、それはもう治っている、と言う。一番目のsak'apは受け取ってないから、あなたの眼と背中が痛い、しかし、今は治っている。sak'apは二度したので今はyumtz'ilは受け取った。残念なのは、あの人(ヒゲの見知らぬ男)を見てもらったよかったのに。あの人がyumtz'ilだったんだ、あの人(ヒゲ)が手にした葉はどれもすばらしい薬草だったんだ、と言う。こんな

時があったんだ。」

(アダルヘイト・ビーヤリアル・ペラルタ 65才 Tz'an出身)

##### 説話 (2)

「この協同組合で小さなトウモロコシ畑を作っていた。その畑には、壁もないcolorché(この辺りで家を周すのに使う細い木のこと。ユカタンのマヤ人の家は、柱を立て、この木を周してから土で壁を作り、その上に白い石灰をぬる)の小さな家で、われわれは眠っていた。

寒く感じていた。目がさめたとき、あつく感じた、わしの背中が。どうしてかなと思って見ると、チビッ子の男の子が走っていく。燃えさしがあって、まだ少し木があるので寒くはない。起きたときは、まだ少し火がある。寒いとき、トウモロコシ畑で働くときはこんなふうにする火をつけておくんだ(寒い時期には、夜燃やした薪の火の木炭状になった部分を細かくして、自分が眠るハンモックの下に床に広げておくとポカポカと暖かい。)

次の朝、仲間に「見たか」「見たよ」「あれは一体何だね。小さな男の子が走っていったけど」「行ってみようや」「行こう」

……そこで、こんな、これくらいの(手で直径50cmぐらいの大きさを示す)穴を見つけた。そこで掘り始めた。掘って、掘ってゆくと、そこに横になっているのを見た。石でできた人形のような形をしていた。「それだ」「しかし、それをつかまえてはいかんぞ。それは悪いことをする。熱が出るぞ。それは治らないで、死ぬぞ。それはメンがprimiciaをして、sak'apを作って与えて、sak'apを飲んで、体にぬって、そうしないとお前は死ぬぞ」「本当か?」「本当さ」そこで、私は怖くなって、つかまえなかった。かれらは、いたずらをして歩いている。夜になったら出てくる。昼は出て来ない。」

(Sr.Lorenzo Celis Yeh 61才 Oskutzkab出身)

##### 説話 (3)

「私のおじいさんが七面鳥を射ち、持ってきて火にかけて、そして寝た。それをalushが見ていておじいさんが寝床に入ったのを見て、七面鳥を持って行く。おじいさんは、それがどこに入ったか走って見に行った。

夜が明けて、おじいさんはそこへ捜しに行った。そこは丸くなってchultún(石に出来た穴)……というような所で、そこへ、おじいさんは入った。そこに七面鳥はあった。私のおじいさんは特別な術を知っていて、「明日になったら、この悪餓鬼たちをぶっ殺してやる」と言って、七面鳥を取り上げて、家に持って帰った。

chayas(chái:Maya 葉を食用とする)を捜した。chayasをナイフでこまかく刻んだ。そして、灰と混ぜた。

そして、夜に入って10時頃、2つの人形が来た。(それらはalush)。それらはchayasを持って

は運んでいき、持っては運んで行った。一晩中、それをしていた。夜が明けた時、私のおじいさんはsak'apを火にかけ、粉にして、それをyumtz'les (yumtz'ilob: マヤ語複数, ~lesはスペイン語複数) に捧げた。

そして、chultúnに着いてみると、chayasはその周囲にグルリとあった。そこで、chultúnを掘り始める。そこにalushは眠っている。そこへsak'apをかけた。alushはそのsak'apで死んでしまった。alushはk'at (粘土) で出来ているのでsak'apの水で溶けてしまった。alushは二度と出てこなくなった。」

(アダルヘイト・ピーヤリアル・ペラルタ 65才 Tz'an出身)

#### 説話 (4)

「昔々、Isidroの祖父の時代には、人々はalushを生きかえらせたものだった。alushは粘土でできているにすぎないのに、かれらは、alushを生きかえらせた。

かれら樹脂(copal)を9月9日夜、徹夜で燃やし続けた。するとalushは生きかえるのだった。かれらはalushに、かれのヒョータン、犬、銃、マチェテを与えて、放した。それに感謝して、alushはかれを自由にしてくれた人たちのミルバの面倒を見てくれた。

alushが守るミルバはいつも緑であり、そのミルバで盗みを働く者はよく熱病にかかった。

父親たちは息子たちに、夜に口笛を吹いたり、叫んだりするなど注意したものだが、それというのも、alushが出てくるのは夜だからである。

Santa Mariaでは、alushが犬たちを連れて、夜に狩りをするのを時々聞く人たちがいる。かれらはalushの叫び声、犬の遠吠え、銃声を聞く。そのようなとき人々は、sak'apを用意して、alushがそれを飲んで、かれらに害を与えないようにする。

かつて、30年ぐらい前に、ここで騒動があった。40人ほどの男たちが、その中にはDon Elutの父の父もいたのだが、かれらが南の方へ送られて藪の中に入った。

そこで、かれらは道に迷ってしまったのだ。そうするうちに、突然かれらは人気のない村にたどりついたが、その村には1フィートぐらいに育ったトウモロコシの実った畑と、スイカ畑があった。男たちの何人かがスイカをちぎった。

すると、藪がカサカサと大きな音をたてて揺れ出した。と同時にヒューヒューという音がし始めた。男たちはあたりを見廻したが、誰も見当たらなかった。そこで何人かの男たちがスイカをちぎって、食べ始めた。すると、その場でかれらは倒れて死んだ。約10人が死んだ。残りの30人は大将のもとへもどった。

大将は100人の男たちをその人気のない村に送って、トウモロコシを切らせ、その中に何がかくされているかを調べさせた。ミルバはおよそ100メテカほどであった。

男たちがトウモロコシを切り始めると、藪が揺れ、ヒューヒューと音をたてだした。突如alushが藪の中から飛び出して来た。男たちはalushを殺そうとした。何人かは銃で、他の者は

マチェテでalushを殺そうとしたが失敗した。男たちは大将のもとへ逃げ帰った。

大将は200名の男たちをその村に送り、ミルバを破壊するよう命令した。しかし、男たちがその村にもどろうとした時に、かれらはその村への路を見つけないことができなかった。その路が消えてなくなってしまったのだ。」<sup>25</sup>

「私も鹿を撃ちに行ったら、alushに木の葉を揺って鹿が寄らないように邪魔をされた。鹿が来たのに……。そこでsak'apを作って持って行ったら、alushは邪魔をしなくなった。」(アダルヘイト 前述)

#### 6) sak'ap

sak'apはyumtz'ilに捧げられるものであり、それが適切になされないことはミルバの状態の悪化を招くだけでなく、正しいsak'apを怠った本人の体調をも悪化する。

sak'apはalushに対抗する呪術的手段でもある。alushについて人々は「alushは‘悪い風’ (k'akashu ik') である。昔の人がこれを作った。k'at (粘土) でできていて、顔(目、鼻、口)、手、足と全く人間と同じである。大きさは30~50cmぐらいである。今でもここにいる。alushは人を殺したり、咬みついたりはしない。人を驚かせたりするだけだ」のごとく語る。メンの作ったものであれ、そうでないにしろ、sak'apはalushを殺すことさえ可能なのである。

## VI メン (呪医=祭司) と儀礼慣習

### 1 マニのメン (men : h-men 呪医=祭司)

ここまで、儀礼の観念的背景を反映させるものである祈りと説話伝承をとおして分析を進めてきた。これらは、変異 (variants) を含みつつ、語られることによって存続してきた。祈りや説話は非合理的な内容を示す場合があるが、それらが語られ続けるかぎり、たとえ祈りが呪文化したり、説話の語られる頻度が少なくなっているにしても、共有された情操経験の一つとして人々の観念を支配し、その社会的意味を失わずにいるのである。

そこで、さらに他の祈りや説話伝承をも材料領域としながら、ch'chacの儀礼によって保持されてきていると考えられる宗教的観念をメンとの関連において取り出していく。

#### 1) メンの呪術的力能

##### (1) 知識と祈り

前述したように、教会の外での儀礼慣習の軸はメンによって維持されており、その場面で供物をし、祈りを捧げること、sak'apを行うことはメンによってのみなされる行為であり、メンは正にその点で他の人々と区別されている存在である。

マニのメンの呪術的力能は主としてこの祈りを中心に展開している。治病、紛出物の探索、争

いごとから来る不安の立て直しなどは主として祈りによって元の形に復元されると考えられている。「祈ると非常に疲れる」とメンは言うし、「写真をとられたり、ウソをついたり酒を飲んだりして品行が方正でないと祈りの力が落ちて、治病が困難である」とも言う。メン(men:h-men)の語源はsaber;to knowであるとする説がある。祈りや儀礼慣習に関するメンの知識は特別のものであり、これらの習慣には鍛錬と年月を要する。知識と技術の獲得は世襲というよりは、メンに個人的に弟子入りして、数年、あるいは10数年の訓練を経て果たされる。

## (2) 希薄なエクスタティック性

祈りの場面でもその他の儀礼の過程の場面でもマニのメンにはエクスタティックな側面は表面上は弱い。かれらの衣装にも何らかの規制もないようであるし、行為や表現も極端に非日常的な色彩は含まない。メンに関しては儀礼上の清浄や禁忌も比較的少ない。メンの行う儀礼は、それが行われる時日が特定されておらず、その儀礼への参加者の態度や資格に特別な規制がくわえられていないことなどから、メンの力能への社会的信頼は強いが、儀礼の過程よりもむしろその目的が重視されているようである。

## (3) メンと風

マニの人たちは、メンを「悪い風(k'akashu ik')に対抗できる力をそなえている」とか「神(yumtz'il)と言葉を交わす力を持っている」と評価する。

悪い風はマヤ・ユカテカにおいては人や動物を問わずしばしばそれらの病因となる。例えば、メンの行う儀礼の一つに土地のための儀礼(jetz'luum)があるが、人々がこの儀礼をメンに依頼するのは飼っている牛、犬、鶏などの育ちが悪かったり、あるいはそれらが死んだりする場合である。水のための儀礼、ミルパのための儀礼も、作物の発育が思わしくなかったり、凶作が続くときである。そして、これらの不幸な出来事、病気、不運は、神たちへ正しく供物をし、祈りを捧げないために、神たちが悪い風を送って、それを手段としてそれらの現象を起こしているのだと説明される。神たちは人を罰するのに悪い風をもって行うのである。したがってメンの行う儀礼は、人々の依頼による神々の宥和であったり、あるいは、神々へ贖罪であったりする。

## 2 メンとyumtz'ilob

メンの捧げる供物と祈りを受け取るとされる複数の存在は集合的にはyumtz'ilobと呼ばれている。yumtz'ilobはbalamたち、chacたちを含んでいる。balamたちとchacたちについてはマニおよびその周辺に以下のような説話伝承が存している。

### 説話 (5)

「ある男が自分の畑に水をやろうと思ってたら、yumtz'ilに会った。yumtz'ilobは水を与えてく

れる神である。

神が男に「お前何がほしいんだ」「わしはmaiz畑にやる水が欲しいんですが、雨が降ってもわしの畑までは来なかったの」。そこで神は男に小さなカボチャを与えた(ヒカラのようなもので、水や物を入れるのに土地の人は使う)。神は天に昇った。

男は水まきを始めた。自分の畑はすぐ下に見えていたので、どんどん水をまいた。気のすむまでまいたら、神がもういいか、というので、もう十分と言うと下へ降ろしてくれた。

自分の畑を見てみると雨は一滴も落ちてなかった。雨は下に落ちるけど、風が横から吹いて他の所へ運んでいった。神がどうした、と聞いたが、雨がなにもないと言うと、神は「お前はもう十分と言ったではないか」「そうなんですがいったいどうしてでしょうか」「お前はしゃべることはしゃべるが、言うことは何もできん奴だ」「すみません」「よろしい、明日私の兵隊を送ってあげよう、水をまくように」。

翌日、神は兵隊と自分の嫁を送った。嫁は小さな男の子をかかえていた。その嫁は子供を木の下に置いた。そして水をまいて、沢山まいて、地上20mにもなり、地は水の下に沈んでしまった。その時母は気がついた。男の子を木の下に置いていたのを。下に降りて捜したけど、見つからなかった。

だから雨が降らない時期のbuleの木から絶えず昼も夜も水滴が落ちるようになった。水滴は唾みたいにポタッと落ちる。それはポタッ、ポタッ、ポタッ。それは母親が子供を想い込んでいる。それは父の神が与えたもので、自分(嫁)がした悪いことに、子供をほったらかしたから、だから泣いている、想い込して。だからポタッ、ポタッと木から落ちている、あの男が死んだ所で、それは神が嫁に与えた罰である。」(Sr.Lorenzo Celis Yeh 61才 Oxkutzkab出身)

### 説話 (6)

「ある日、ある男がマキを取りに行ったら、yumtz'ilにあった。

yumtz'il「どこへ行くのか」

男 「マキを拾いに行きます。しかし、わしはmaiz畑に水をまきたいんですが、なぜならあそこ(畑)にはまったく水が来ない(雨が降らない)ですよ」

yumtz'il「milpaのためにsak'apをしなさい」

男 「いいえ」

yumtz'il「どうして」

男 「どうしてって時間がないから」

yumtz'il「milpaのためにはしなくてはいけない、水がくるように」

男 「いいや、もし許されるならわしが水をまくよ」

yumtz'il「よろしかろう」と言って、つかまえて連れて行った。大きな洞穴に着き、中に入った。中には火があって、balche、sak'ap、shichok'o(スープ)の入った壺が一杯。

yumtz'il 「もし、やりたかったら、今、水をまくことができるか、milpaに」

男 「はい、水をまくことができます」

yumtz'il 「よろしい、ほら、ここに1つのカボチャがある」

男 「どうして、こんな小さなカボチャの水で、milpaに水がまける」

yumtz'il 「少しは役にたつぞ、さあ、行ってまいっておいで」

男 「……はい」

yumtz'il 「馬に乗っていけ」馬囲いに入ると、沢山の、そして大きな馬がいる。大きな馬を選んだ、よく歩く為に。

yumtz'il 「剣を持って行きなさい」剣をとった。

yumtz'il 「道が暗くなったら剣を振りまわせ、そうすれば明るくなる」

男 「ハイ」。馬に乗って行った。すぐに。あそこのmilpaに着いたとき、maizは溷れて死にかけている。今、水をやるぞ、とカボチャのふたを取って水をまきだした。それだけで辺り一面には沢山降ったが、自分のmilpaには雨が来ないで、他の所へ行ってしまう。風が来て、運んでしまう。sak'apをした畑に。かわいそうに、男は着いたときに死にそうだった。着いたとき、

yumtz'il 「水をまいたか」

男 「まきました」

yumtz'il 「よろしい、人にこの事を言っははいかんぞ、今、お前をお前の家に投げ捨ててやる」そして、6回、ムチ打ちを加えて、足をつかまえ振りまわして投げた。

家に落ちた、あそこの。落ちた時、彼の女房が音を聞いた。「あれは何の音かな、何か落ちたが私の家に」家を出てみると、そこに伸びている。「そんな所で何をしているの、この馬鹿者が」と彼女が言う。「何も言うな、今わしのmilpaを見に行くから、今milpaは水で一杯でとてもきれいだから」と言って畑に行った。畑に着いてみるとほこりっぽくて、雨は隣のmilpaに降っただけだった。そこsak'apをあ火にかけ、持って行かねばならないと言って、あそこへ持って行った。自分のmilpaに2日目に雨が降った。」(アダルヘイト・ビーヤリアル・ペラルタ 65才 Tz'an出身)

#### 説話 (7)

「あるとき、私のオジが鹿を射った。次の日、血を流している鹿がどこへ行ったか探し始めた。捜し歩き、捜し歩いた。鹿を見つけることは出来なかった。そこで突然ある男の人に出会った。

男 「おい、何をしているのかね」

オジ 「わしが射った鹿を探しているんですが」

男 「お前は私の鹿たちをいじめとるぞ。毎日、私の牧場に、手を射たれたもの、足を射たれたものが来る。私はその為に沢山仕事がある。今、ここで、お前にムチを打ち与える」木の切

れっ端をつかむと12回打った。そして、そこでわたしのオジは熱にやられて家に着いた。

ものすごい熱で、しゃべることもしない。どうしたのか。そこでメンに見てもらいに行った。照らしてみても (sastún; ガラス玉、水晶玉、ビー玉に見える陰影のこと) 言った。「あんたは鹿射ちに行くが、いつも足等を射っただけなので、あのyumtz'ilにその動物たちの治療の仕事をさせていることになっている。だから、あなたを叩いたんだ、二度としてはいかんぞ、鹿射ちをやめなさい」そこで鹿射ちには行かなくなった。鹿を一発で射殺するのは良いが、足とか手を傷つけるだけはyumtz'ilobは好まんのだ。」

(アダルヘイト・ビーヤリアル・ペラルタ 65才 Tz'an出身)

#### 説話 (8)

「我々は狩りに行ってた。そこで我々はある音を聞いた。青年は、あれは多分jaleu (Sp. tepeizcuinte鹿毛、てんじくネズミ、食べるとおいしい肉が多い。彼等は好んで食べる)、行ってみよう、と言う。

そしたら、ある音がして我々は動けなくなった。足が動かない。そこで我々はしゃがんでしまった。しゃがんでしまったから、ある音がする。多分、それは鹿が来ている様だった。

しかし、それは鹿でなく大きな犬だった。それはyumtz'ilobの犬だった。普通の犬とまったく同じだが、もっと大きかった。そして座った。ちょうど自分と青年の間に体を長くして座った。そうしていたら我々はすごい音を聞いた。それは雷みたいで、鳥やあらゆる音が自分たちのこっちの方(右手)を行っている様だった。そして、また、向こうからこっちの方へくるようなすごい音がする。

そして午前4時ごろ、犬が立ち上がり行ってしまった。犬が行ってしまってから我々も動くことができたし、怖さもなくなった。そこで家に帰った。

そこに着いたとき、ある婦人が亡くなって、その婦人を墓に葬るために運んだとき、自分が変な音を聞いた事を質問したら、知らないのかあなた、とわしに言った。

我々は音を聞いたとき、それを見ようと思った。我々はjaleuと思っていたから、それは、jaleuでないとわしに言う。それは悪い風だ、その通っていたものは、とわしに言う。

それは、しかし、balisboだそうだ。それは人を食べるんだそうだ。それが来たら人を食べるからyumtz'ilが我々を助けてくれたんだ。b'alisbóはchi'ik (Sp. tejon穴熊) みたいだ。そんなことがあったんだ。」

(アダルヘイト・ビーヤリアル・ペラルタ 65才 Tz'an)

#### 説話 (9)

「昔、1人のミルペーロがいた。彼のミルパは、いつも乾いていた。彼のミルパの近くにある他

の人の畑には雨が降るのに、彼のミルバは日照でだめになりそうであった。しかし彼は神をのろったり、冒瀆したりするだけで、自分の畑に雨が降らないことを嘆いていた。

ある日、彼は道で1人の背の高い白髪の老人に会った。その老人は彼に話しかけてこういった。「私に着いて来なさい。洞穴へ案内しよう。その洞穴であなたは何匹かの鹿毛てんじくネズミを見つけるでしょう。」「わかりました」とミルペーロは言って、その白髪の老人について行った。

その老人は彼を水のない洞穴 (actun) に案内した。ミルペーロはそれまでその洞穴に来たことはなかった。二人はその洞穴の中に入って行った。老人が先を歩いた。奥へ奥へ二人は歩いていった。そしてとうとうミルペーロはその洞穴からどうやって外に出たらいいのかわからなくなった。とうとう彼らはトウモロコシで作った食べ物 (tuti uah) が沢山積まれた場所に来た。その後、2人はカボチャとメロンが山のように積まれた場所を通り過ぎた。

そうするうちに2人は1つの大きな編み籠 (canastro: ミルバからトウモロコシを運ぶのに使う籠) のある場所にたどり着いた。そこはかつて何人かの人達が暮らしていた平地であった。ミルペーロが辺りを見回している間に、老人は一頭の馬を準備した。

ミルペーロは老人を押しつけて自分で馬に乗った。すると老人がミルペーロに尋ねた。「誰がその馬に乗って行ってよいといったか」「誰もいいとは言わなかったが、私がこの馬に乗って行って、私のミルバに水をまきたいのだ」と答えた。「よろしい。お前がこの馬に乗っていけ。ただし、お前のミルバだけに水をまいて、他の人のミルバには水をまかないと約束をしろ」、老人は言った。ミルペーロは言われたとおりの約束をした。すると、その馬は天井の穴を通して、空高く昇っていった。

その馬がミルバの上にさしかかった時、雨が滝のように降り始めた。そこで、ミルペーロは大変喜んで、馬に乗って洞穴にもどった。老人はミルペーロに約束を守ったかどうかを尋ねた。ミルペーロが「はい」というと、老人はミルペーロに外の世界に通じる道を教えて出させた。

ミルペーロは自分のミルバに出かけてみると、彼が大変がっかりしたことに、他の人のミルバは全部雨水で満たされているのに、彼のミルバは干上がっていた。そこで彼は他のミルペーロに「あなた達のミルバには雨が降るのに、どうして私のミルバには決して雨が降らないのだろう」と尋ねた。他のミルペーロ達は自分たちが何をしたらかを彼に教えてやった。つまり、それぞれのミルバの中に、yumtz'ilobのための2つの大きなヒカラに入ったsak'apを用意したことを教えてやった。しかし、そのミルペーロは彼らをあざけて、sak'apなどばかげたことにすぎないと言って、彼らが準備したsak'apを自分で飲んでしまった。

そして、彼は再び洞穴へもどった。洞穴の中に通じる道を見つけると、中に入って行った。すると、そこにまた背の高い白髪の老人がいて、また馬を用意していた。ミルペーロはここでもまた、馬にのせてもらい、空高く昇って自分のミルバに水をまきにいかせてくれるように老人に頼

んだ。老人は同意した。そして、ミルペーロのミルバだけに水をまくことを約束させただけであった。

今度はミルペーロは自分のミルバを確実に見つけることができるはずであった。なぜなら、ミルバを去る時に、彼はあらかじめミルバの中にたてられた長い棒の上に、布をつけておいたのだ。そういうわけで、彼は馬が空高く昇った時に、自分のミルバを見つけた。しかし、馬が彼のミルバを横切ろうとした時に、彼は自分のミルバを見つけることができなかった。なぜならば、熱い蒸気がまるで炎のように地面からたちこめていたからである。ミルペーロはあやうく火傷をしそうになった。

そこで彼は洞穴にもどった。老人は彼がどうすべきかを教えてやった。すなわち昼間に日差しが最も強い時に、自分のミルバの中にsak'apを準備し、その前にひざまづいて祈るように言った。ミルペーロは老人に言われたようにした。三たび洞穴にもどって、もう一度馬に乗り、畑の上を駆けることができるように老人に頼んだ。すると、前と同じように滝のように雨が降った。しかし今度は、彼が馬を老人にもどして、自分のミルバに行ってみると、ミルバには、雨が大量に降っていた。そして、辺り一面に大きな水たまりができていた。彼はミルバにひざまづいて、yumtz'ilobの許しを乞うた。すべてのミルペーロがこの話を知っている。そして、それは本当の話である。」<sup>26</sup>

#### 説話 (10)

「かつて、ある男が洞穴に通じる道を見つけた。洞穴の中には大量の水があるのがわかった。しかし、水は洞穴の奥の方に隠されていた。突然、男は洞穴の中に閉じこめられているのに気づいた。外に通じる道が閉ざされてしまったのだ。

すると、かれはchac達の声を聞いた。彼らは、命令を出した。chac達は時折「X-Baacin, 私の馬を用意しろ」(X-Baacinはchacの馬の世話をするものの名前である) と言っていた。こういながらchac達は三度X-Baacinに命令を下した。

そうする間、男はずっと隠れていた。馬が準備されると、chacはそれに乗ってどこかへ立ち去った。それぞれの馬は、輪のような小さな丸い穴を通して洞穴の外に出た。一頭が出ると、次の一頭がつづいた。そういう風にして3(人)のchac達が洞穴の外に出た。そしてchac達が皆外に出ていってしまうと、洞穴の中には小糖雨が降り続いていた。

そこで男は、それまで隠れていた所から出てきて、chacがやっていたように「X-Baacin」と呼んだ。返事は全然なかった。男はまた、「X-Baacin」と呼んだが、この時も返答はなかった。三度目に「X-Baacin」と呼んだとき、X-Baacinは「何のご用ですかご主人様」と答えた。男は「私の馬を用意しなさい」と言った。するとX-Baacinは「今は馬はおりません」と答えた。しかし、X-Baacinは馬を準備しに行った。

彼が馬に近づこうとすると、馬は飛んだり跳ねたりしながら男を跳ねとばした。三度男は馬

を捕まえて、やっとのことで馬を静めることができた。すると、男はX - Baacinが「ご主人様、馬が用意できました」と言うのを聞いた。しかしその馬に乗ろうとしたときは三度目にやっと乗ることができた。

馬に乗ると、突然男は馬とともに、上の方にもものすごい速さで突き上げられて、天井にある丸い穴を通して洞穴の外に出た。彼は空を馬で駆けた。すると、かれの周りには強風 (chac ikal) が吹き荒れて、大木でさえも吹き倒された。彼が乗っていた馬は栗毛 (izimin alazan) だった。

そうするうちにchac達が全員集まって、男が乗っている栗毛の馬を捕まえようとした。しかし最初のうちは、chac達はその馬に近づくことができなかった。栗毛の馬がchac達を跳ね飛ばすのだった。すると1人のchacが他のchac達に、その馬に乗っている男を撃てと命令した。男が馬を乗りこなしている時、chac達は電光 (hadz chac) で男を撃った。そしてchac達は栗毛の馬を捕まえて、洞穴の中にもどした。栗毛の馬が再び洞穴の外に出て駆けると、強風 (chac ikal) が吹いて、この世は破壊されるだろうということだ。」<sup>27</sup>

これらの説話伝承からも理解できるように、yumtz'ilobは自然の要素 (森、山野、藪、雨、水、風等々)、動物 (鹿、蜂、馬、犬など)、村、洞穴、井戸などの空間と深く結びついた存在である。

yumtz'ilobは次に掲げる2つの祈りを材料とすると、ミルパ、肥沃な未開墾の地、種、種の植えつけられた畑、小丘、森、天、空、雲などを守る神たちと呼びかけられている。もし、pahuatunを一説にしたがって地下の神々とする、地下もそれらによって守られている。yumtz'ilobが具体的な姿で描かれることは少ないが、‘白髪の小柄な老人’ としている物語も存している。説話伝承のテーマはミルペーロなどの男たちと、yumyz'ilobの出会いやその後の結末を中心としている。女たちが登場する話は極めて少ない。また、種々の地名 (6カ所) および洞穴名 (5カ所) に祈りが言及していることも着目すべきであろう。村を守る神の観念の濃さと、洞穴という空間の重要性を示唆する一つのデータである。

#### 祈り(10)

「dios yumbil,dios mehenbil,dios espiritu santo,Amen…私の祈りが届いたら、神霊は3度崇められる、…肥沃な未開墾の地の守り神たち、村を守る神たち、種を守る神たち (canan semilla)、種を植えた畑を守る神たち (canan era)、[……]、小丘、[あるいは塚]を守る神たち (canan uitz)、強いつむじ風たち (kakal mozon ikob)、肥沃な未開墾の地を守る神たち、森を守る神たち (u kuil kaax)、black Pahuatunの神、red Pahuatunの神、yellow Pahuatunの神、white Pahuatunの神、天の4つの隅の、雲の4つの隅の、私の祈りが雷光の神chacに届いたら、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷火の神chacに届いたら、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷鳴の神chacに届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷雨の神chacに届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがトゥモロコシ畑を守る美しい女の守り神 (icna cichpan colel canan

gracia) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがトゥモロコシを守る美しい女の守り神 (icna cichpan colebil metaan gracia) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがトゥモロコシが空腹である所 (icna noh uih gracia) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが最も小さい、天のchac (icna tuppi caan chac) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが偉大なchacの右手 (noh u kab nucte chac) に届くとき、偉大なbalamの手 (kab nucte baiam) に届くとき、偉大な天の神の第一の聖壇 (yax mesa kuh tu noh caan) に届くとき、yumil diosの右手の側の第一の聖壇 (yax altar tu noh u kab) ……神霊は3度崇められる……」(メンが捧げ物の置いてある聖壇の前に膝まづいて祈るとき)

#### 祈り(11)

「私の祈りがYalcoba (地名) の神の部屋に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがChichen (地名) の神の部屋に届くとき、神霊は3度崇められる、ここで私は祈る、…雷鳴の神chacたち (ahbob lencaan chacob)、雷火の神chacたち (ahlelem caan chacob)、勘定係のchacたち (xoc tun caan chacob)、全ての階級のchacたち(ahchibintun chacob)、dios chac,dios chac,dios balam,雲の中の入口(holtuntazmuyal),私の祈りがChihimila (地名) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがKaua (地名) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが大きな村Valladolidに届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがZamal (Chac Komの近くの洞穴) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがX-Cehni (Cuncunulの近くの洞穴) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがPixoy (地名) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがX-cumzuc(Pixoyの近くの洞穴) に届くとき、神霊は3度崇められる、ここSan Miguelの聖壇の前で……ここTicinacab (地名：乾上がった洞穴がある) で、大きな村Tekom (地名) で、私の祈りがZayaltunite(?) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがX-katbe (San Diegoの近くの洞穴) に届くとき、神霊は3度崇められる、ここdios yumbilの聖壇の前で、私は祈る、San Miguelの聖壇の前で、ここ1 [人] のchacの聖壇の前で、Amen」(chachacの2日目に、メンがsakapを神たちに捧げるときの祈り)

yumtz'ilobは東の空にいると考えられている。しかも、天・空・雲の4隅を守るとされている。したがって、以下の祈りのように、人々がトゥモロコシで作った食物、sak'ap,balcheを神たちに捧げると、それらは降りてきて供物を受け取ると信じられている。供物は生ものではなく、全て煮たり、炊いたりしたものである<sup>28</sup>。こうして、供物と祈りが正しく捧げられているかぎりはyumtz'ilobは人々を悪い風で罰して病気にしたり、かれらの畑や家畜などに害を及ぼすことはないのである。

#### 祈り(12)

「ここに、私は1つの聖なる9つ重ねの、トゥモロコシで作った食物 (bolon taz uah) を捧げる、

1つの聖なる偉大な、トゥモロコシで作った食物を、肥沃な未開墾の地を守る神たち (yum ahcanan cacabob) に捧ぐ、ここChan Komの村を守る神たち (ahtepalob) に捧ぐ、私は祈る、それらの神たちが来て捧げ物を受け取る、1つの聖なる偉大な聖壇 [において]、聖壇の4つの隅において、ここに、肥沃な未開墾の地を守る神たちが降りてきて……dios yumbil,dios mehenbil,dios espiritu santo,Amen) (捧げ物の1つ1つを手にとってこの祈りで捧げた後、聖壇の上に置く)

#### 祈り(13)

「私たちは膝まづく、ahkin idzac (儀礼の過程で、メンに依頼されてその仕事を手伝う人。メンの右手側にいる) が捧げ物ができるように、ahkin idzacは器 (tzel) を持ち上げ捧げる、ここ、1 [人] のchac聖壇の前に、偉大な東にいる、ここ、San Miguelの聖壇の前に、dios mehenbil,dios esoiritu santo) (家禽や家畜の肉を聖別するときの祈り)

#### 祈り(14)

「(balcheの入った最初の器 (tzel) を捧げる前にメンは祈る) 今や、最初の器を送るときです、dios yumbil, (二番目の器が捧げられるとメンは祈る) 今や、二番目の器が送られた……」(メンがbalcheを聖壇やその上に置かれている木製の十字架にふりかけるときの祈り)

## VII おわりに

メンは治病儀礼および既に言及した種々の儀礼を行いうる事実によってのみ他の人々と区別される存在である。その他の点で、かれらの身分や生業についての明確な限度はない。マニのメンは普段はミルペーロであり、パルセレーロでもある。しかしながら、マニの人々の現実の生活場面において、最も大きな不安のいくつかを儀礼をとおして立て直しうる人物として重要な社会的機能を果たしている。さらに、メンが行なう儀礼慣習の中に、マヤーユカテカ文化に残存するインディオ的・マヤ的な宗教的観念が保持されていると考えられ、それらへの理解はマニおよびその周辺地域の宗教文化、カトリック文化を考察していく上で是非必要なことであると思われる。

## 注

<sup>1</sup> 野村 暢清 1988『宗教と社会と文化』九州大学出版会 pp.1-137 参照

<sup>2</sup> Émile Durkheim 1968 Les formes élémentaires de la vie religieuse. Paris. pp.1-138  
Marcel Mauss 1978 Sociologie et anthropologie. Paris. pp.3-138

<sup>3</sup> マニのパルセーラはpozo 8 (12世帯), pozo 9 (72世帯), pozo 10 (31世帯), pozo1, pozo2, pozo3, (合わせ

て145世帯), pozo antigua (72世帯) からなっている。政府がejido de Maniにpozoを作り、そのpozoで働きたい者の人数を募る。pozoの面積を人数で割り、各々に区画の半分の伐採をさせる。Banco de Monteから若木が送られてくると、技師の指導で7m×8m間隔に植えつける。3年を経て残りの半分の伐採に取りかかる。伐採には人手を要するが、Banco de Monteが年に3回、4ヶ月ごとに人夫賃を支払ってくれる。そのパルセーラで収穫が始まるとBanco de Monteは人夫の日当の助成を止める。10年間、パルセーラはBanco de Monteに借金を返済していく仕組みになっている。

<sup>4</sup> マニでは平均4haを焼畑にしてミルパを拓いてゆくが、年に8~10haずつ拓きうる家族はマニに6家族存在する。1ha当たり500kg~1000kgの収穫がある。10人家族の食料として年に500kgのトゥモロコシが必要である。ミルパでの労働には1時間平均160ペソが支払われるが、通例1日5時間労働で約束がなされる。マニにおける物価は以下のごとくである。

日用品		
	単位	ペソ
トゥモロコシ	1kg	40~45
フリホール(豆)	1kg	75
砂糖	1kg	75
ラード	1リットル	300
塩	1kg	35
牛肉	1kg	1.000
米	1kg	150
パン	1個	12
石けん	1個	30
炭	1kg	50
灯油	1リットル	60
タバコ	1パック	150
ローソク	1本	25
マッチ	1箱	10
ニワトリ	1羽	800
エンドウ豆	1kg	350
鶏卵	1個	12~13
トルティーヤ	1kg	65
豚肉	1kg	800
ペピータ	1袋	400
下着	1	200
ワイシャツ(男用)	1	1.000
ブラウス(女用)	1	1.200
ズボン	1	1.500~2.000
スカート	1	1.500
靴	1	1.500~2.500
帽子	1	800



その他の物品

	単位	ペソ	
パホ葺き	1軒	15.000	10~15年毎
壁塗り替え	1軒	8.000	10~15年毎
家 (イ)コンクリート	1軒	200.000	
(ロ)コンクリートとパホ	1軒	100.000	
(ハ)パホ	1軒	40.000	
石垣		5.000	
牛 (イ)4~5ヶ月	1頭	10.000	
(ロ)1年	1頭	30.000	~40.000
豚 (イ)10kg	1頭	8.000	
(ロ)90~100kg	1頭	40.000	
七面鳥	1羽	6.000	
ニワトリ	1羽	800	
鹿	1頭	10.000	
猪	1頭	4.000	
アルマジロ	1匹	1.000	
兎	1匹	1.000	
野生七面鳥	1羽	3.000	
鳥	1羽	500	
軽トラック	1台	180.000	(4年前)
三輪リヤカー(トスイクロ)	1台	50.000	
テレビ (モノクロ)	1台	30.000	(カラ-60.000)
バス代(マニ-オジュツガ)	片道	40	(10~12km)
タクシー代(イ)昼		50	(10~12km)
(ロ)夜		1.000	(10~12km)
三輪リヤカー代		50	

<sup>5</sup> マニにおける物価は以下のごとくである。

日用品

	単位	ペソ
トウモロコシ	1kg	40~45
フリホール(豆)	1kg	75
砂糖	1kg	75
ラード	1リットル	300
塩	1kg	35
牛肉	1kg	1.000
米	1kg	150
パン	1個	12
石けん	1個	30
炭	1kg	50
灯油	1リットル	60
タバコ	1パック	150
ローソク	1本	25
マッチ	1箱	10
ニワトリ	1羽	800
エンドウ豆	1kg	350
鶏卵	1個	12~13
トルティーヤ	1kg	65
豚肉	1kg	800
ペピータ	1袋	400
下着	1	200
ワイシャツ(男用)	1	1.000
ブラウス(女用)	1	1.200
ズボン	1	1.500~2.000
スカート	1	1.500
靴	1	1.500~2.500
帽子	1	800

その他の物品

	単位	ペソ	
パホ葺き	1軒	15.000	10~15年毎
壁塗り替え	1軒	8.000	10~15年毎
家 (イ)コンクリート	1軒	200.000	
(ロ)コンクリートとパホ	1軒	100.000	
(ハ)パホ	1軒	40.000	

石 垣		5.000	
牛 (イ)4~5ヶ月	1頭	10.000	
(ロ)1年	1頭	30.000	~40.000
豚 (イ)10kg	1頭	8.000	
(ロ)90~100kg	1頭	40.000	
七面鳥	1羽	6.000	
ニワトリ	1羽	800	
鹿	1頭	10.000	
猪	1頭	4.000	
アルマジロ	1匹	1.000	
兎	1匹	1.000	
野生七面鳥	1羽	3.000	
鳥	1羽	500	
軽トラック	1台	180.000	(4年前)
三輪リヤカー(トレスイコ)	1台	50.000	
テレビ (モノクロ)	1台	30.000	(カラー60.000)
バス代(マニ-オホクツカブ)	片道	40	(10~12km)
タクシー代(イ)昼		50	(10~12km)
(ロ)夜		1.000	(10~12km)
三輪リヤカー代		50	

マンダリナ	1箱	600	50	30.000		
アボガド	1箱	600	40	24.000	1kg	50
メロン	1箱	800	40	32.000	1kg	50
パパイヤ	1箱	1.000	30	30.000	1kg	50
マンゴ	1箱	800	40	32.000	1箱	50
ハバナ・トウガラシ	1箱	2.500	10	25.000	1kg	850
トウガラシ(chile verde)	1箱	1.500	10	15.000	1kg	500
フリホール	1束	40	60	24.00		
チャーイ	1箱	600	10	6.000	1kg	100

計 743.900 (1ドル=330ペソ)

7

	男	女	計
日用雑貨			13
酒 屋			2
薬 屋			0
トウモロコシ碾			3
パ ン 屋			1
床 屋			7
肉 屋			4
食 堂			1
仕立て職	7		7
大 工	2		2
靴(修繕)屋			0
玉 突 き			1
左官石工	40		40
部品組立工場			1
楽 師	(7)		(7)
医 者	1		1
鍛 冶 屋			0
トウモロコシ商人			5
レンガ商人			0
タクシー運転手	5		5
(小学校)教師	7	3	10

6

	単位	数量	計(ペソ)	単位	ペソ
ナンセン(キンカンのような柑橘類)	1箱	800~1.000	100	80.000	1kg 100
ミカ ン	1箱	500	100	50.000	1kg 25
サラムヨ	1箱	1.500	100	150.000	1個 50
キューリ	1箱	400	200	80.000	1kg 50
ス イ カ	1箱	600	100	60.000	1kg 30
ト マ ト	1箱	800	100	80.000	1kg 50
レ モ ン	1箱	350	50	17.500	1kg 20
カボチャ	1箱	600	50	30.000	1個 20

神 父	1		1
メン(呪医＝祭司)	3	1	4
			108
			(楽師を除く)
パルセレーロ			338 世帯
刺しゅう職人	5	10	15

- <sup>8</sup> Émile Durkheim, 1968  
Les Formes Élémentaires De La Vie Religieuss.Presses Universitaires De France. pp.428-548  
古野清人訳『宗教生活の原初形態』上下  
岩波文庫、1977年.177-267頁（下）  
Marcel Mauss, 1978  
Sociologie et Anthropologie. pp.1-141  
有地享他訳『社会学と人類学 I』弘文堂、1973年.47-217頁  
Clifford Geertz, 1973  
The Interpretation of Cultures:Basic Books, Inc,Publishers. pp.87-142  
Edmund Leach, 1976  
Culture and Communication:Cambridge University Press. pp.77-79  
青木保・宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店、1981年  
Rethinking Anthropology:The Athlone Press. pp.124-136  
青木保訳「時間の象徴的表象に対する二つのエッセイ」『未開と文明』所収  
1969年 314-332頁  
秋山さと子・弥永信美訳  
『通過儀礼』思索社 1977年 7-212頁
- <sup>9</sup> マニのbanndaはSan José、San Tiágo、San Juan、Candelariaの4区域である。
- <sup>10</sup> piiはマヤ - ユカテカの地中かまどである。穴を40～50cmの深さに掘り、その中に燃えやすいシバ類や木片を置く。それらの上に大きな木々を何十本とねかせて、木の上には石を積み上げる。火をつけて石を焼く。焼けた石（sintúm）を木で砕いて平たくそろえた後、booの葉に包まれたpiiに水を少量ふりかけて石の上に置く。その上にbekj'（樫の木）やshaan（ヤシの木）をかぶせて、最後に土をもって約1時間～1時間半待つ。
- <sup>11</sup> 水にLonchocarpusの樹皮を浸しておいて、その後、蜂蜜を加えて作る。
- <sup>12</sup> pómの煙は人の魂を呼び寄せる働きをするという。
- <sup>13</sup> ニワトリにbalcheを飲ませる場合もある。
- <sup>14</sup> エネケンを割いて作ったヒモ（tilas）を6本敷き、その上にbooの葉を12枚のせて水をふりかけ、トルティーヤ15枚を重ねる。一番上のトルティーヤに指先で4つの穴をもうける。人々はこれは「目」とであるという。その目の中にpepita, balcheを注ぎこんだ後、トルティーヤでふさぐ。穴をあけること以降の作業はメンが行う。
- <sup>15</sup> マイスとpepitaで作るがpiiの小型といえる。人々はこれを石だといい、yumtz'ilobがこれでミルバを守ると考えている。
- <sup>16</sup> みかけはpiiに似ているが、トルティーヤにしないで、sopaのために作られる。ch'im15個で1つのwolwaができる。
- <sup>17</sup> Mushúが古いマヤの名称である。マイスに石灰を混ぜて煮た後、粉にする。これをmasaと呼ぶが、masaの中からマイスの殻を取り除き、それに豚油、塩、peilonという種の豆を混ぜる。厚さ3～4cm、直径約20～25cmの大きさの丸いセンベイ状にする。

- これらをバナナの葉（火で少し焙られている）に包み、pii（註9参照）で蒸す。
- <sup>18</sup> 黄色でトロリとしたスープ状の食物で、七面鳥、鶏、玉葱、葱、塩、葉草、胡椒ニンニク等が入っている
- <sup>19</sup> 古いマヤ語ではch'ok'apという。pii（註16参照）がまだ熱いうちに、小さくほぐしてバラバラにして、それにk'olを入れて混ぜてドロドロの状態にした食物。
- <sup>20</sup> huáji cheémの聖壇は次にかかげる図のようである。この聖壇は4脚の台である。
- <sup>21</sup> Chan Kom. 1934. p138
- <sup>22</sup> われわれが収集した祈りの意味を知る者はメンを含めて誰もいない。そこで、ここではRedfieldとAlfonso Villa Rojasによって収集され、Ralph L. Roys, Manuel Andradeによって訳出された後、Chan Komの古老によって修正されたマヤの祈りを採用し、仮説的考察の材料としている。一つの村においても道一つへだてて祀る神が異なっていたり、同じ神を祀っているにしても、その神に捧げられる経文に相違が存する事実などをわれわれは知っているが、マヤ - ユカテカ文化という同系統の文化内における一つの要素としてこれらの祈りを取り上げ、マニの人々によって保持されてきているであろう宗教的観念を仮説的に取り出す一材料としている。
- Chan Kom. 1934. pp. 339-356を参照。
- なお、本稿で使用した説話伝承の採話と翻訳に対しては、猪又 徹 山口県立大学教授の全面的な援助を得ることができた。ここに銘記して心から謝意を表する。
- <sup>23</sup> Chan Kom. 1934. p. 134
- <sup>24</sup> Genetの説によるとPahuatunは地下に住み、大地を支えている神たちである。bacabたちは大地に立って天空を支え、chacたちは天空のみを守っていると考えられている。Chac Kom. 1934. p. 116およびp. 369参照。
- <sup>25</sup> Chan Kom. 1934. p. 121参照。
- <sup>26</sup> ibid. pp. 332-333参照
- <sup>27</sup> ibid. pp. 333-334参照
- <sup>28</sup> Chan Komでは供物は冷たい（ziz u cuch）と熱い（choko cuch:kinal cuch）に分類され、sak'ap balcheやpiiで作られている全ての食物は冷たいとされる。Redfie&Rojes, 1934. p130参照。

本稿は、メキシコ調査委員会 1987 『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究（IV）』に報告した拙稿「ユカタンの一村落マニにおけるメン（呪医＝祭司）と雨乞いの儀礼（ch'achac）について」を大幅に改稿したものである。

筆者は現在1983年から継続しているマニにおける調査研究の成果を集大成する作業に取り組んでいるので、その作業の一環として本稿を作成し寄稿した。

## 引用参考文献

- Robert Redfield & Alfonso Villa Rojas  
1934 Chan Kom, A Maya Village The University of Chicago Press pp.107-147  
Friar Diego de Landa  
1937 Yucatan Before And After The Conquest Dover Publication, Inc. pp.1-70  
Irwin Press  
1975 Tradition and Adaptation Greenwood Press pp.44-70;pp.1c71-200  
Richard A. Thompson  
1974 The Winds Of Tomorrow The University of Chicago Press pp.52-79  
Oscar Lewis  
1972 Life in a Mexican Village Tepoztlan Restudied Unuversity of Illinos Press  
pp.80-129;pp.253-283.  
Émile Durkheim  
1968 Les Formes Élémentaires De La Vie Religieuss Presses Universitaires De France  
pp.428-548

古野清人訳『宗教生活の原初形態』上下  
岩波文庫 1977年 177-267頁（下）

Marcel Mauss

1978 Sociologie et Anthropologie pp.1-141

有地享他訳『社会学と人類学Ⅰ』弘文堂、1973年、47-217頁

Edmund Leach

1976 Culture and Communication Cambridge University Press pp.77-79

青木保・宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店、1981年

Rethinking Anthropology The Athlone Press pp.124-136

青木保訳「時間の象徴的表象に対する二つのエッセイ」『未開と文明』所収  
1969年 314-332頁

Clifford Geertz

1973 The Interpretation of Cultures Basic Books, Inc. Publishers pp.87-142

秋山さと子・弥永信美訳

1977年 『通過儀礼』思索社 7-212頁

宇野圓空

1940年 『マライシヤに於ける稲米儀禮』東洋文庫 1940年